

## 鬼師の世界

—— 黒地：(株)柳沢鬼瓦と鈴木製瓦 ——

高 原 隆

第4グループ<sup>1)</sup>に属する鬼板屋として、柳沢鬼瓦を調査した。ところが詳しく話を聞いて回っていくにつれ、意外な展開になってきたのが柳沢鬼瓦である。しかし、まずは最初に設定した第4グループの一鬼板屋として取扱っていくことにする。なぜなら当の初代柳沢鬼瓦に当たる柳沢昭二郎が語った事柄の範囲では、第4グループのカテゴリーに入るからである。それ故、調査した順にここでは柳沢鬼瓦について述べていくことにしたい。そして実際に調査を進めるに従ってその都度新しい展開になっていったのである。ここがフィールドワークの面白いところであり醍醐味でもある。

柳沢鬼瓦へはじめて訪れたのは平成12年(2000)1月20日である。当時は柳沢鬼瓦だけでなく、ほかの鬼板屋へも次々と立ち寄り工場を見せてもらい、事務所で話をいろいろ伺うといった事をかなり頻繁にしていた。理由は当時、私自身まだ鬼板屋の様子が雲をつかむような感じで、はっきりとした輪郭を描き切れていなかったのである。興味深くやりがいのある研究対象にめぐり会えたことは明らかであったが、何しろザッと二、三年ほどかけてつかみきれぬ相手ではなかったのである。全体像を把握するのにしばらく時間がかかった。事実、全く白紙の状態からこの研究は始まっている。そして実際にまとめ始めたのは平成14年に入ってからのもので

あった。平成10年に調査を始めているからほぼ4年間は地道に実地調査を集中して重ねていた事になる。豊橋から蒲郡を抜けていく国道23号線は私にとって調査街道になった。碧南・高浜はその先にある。車で片道90分ほどの距離である。朝方出ると夕方あるいは夜遅くになって豊橋へ戻るのが常である。その間にはその23号線自体がバイパス化されて途中の道が大幅に変わっていった。現在も工事中である。それ故に行き慣れた道なのに迷うこともたびたびある。

それでもやがて第1グループ、第2グループ、第3グループといった三州鬼瓦の鬼板屋の地図が見え始め、それぞれに自分なりに分けたグループごとに第1グループから書き始めて現在に至っている。柳沢鬼瓦は第1グループから第4グループに分けた時点では第4グループと見なした。それ故、結果として平成21年へとずれ込んだ次第である。この第4グループの特徴は、主だった鬼板屋としての系図を持たない、新興の鬼板屋群を指す。

### (株)柳沢鬼瓦

柳沢昭二郎は昭和12年(1937)2月5日に生まれている。家は終戦当時、畑や田を借りて農家をしていたという。父親は昭二郎が7、8歳の頃に亡くなり、また父親の写真も残っておらず、母親も父親について語っ

たことがなく、全く記憶に無いと言っていた。8人兄弟（男6人、女2人）の下から二番目だという。そして8人兄弟の中で鬼板師になったのは昭二郎一人であった。また生まれは碧南ではなく豊橋の岩屋下であった。現在私自身が豊橋に住んでおり、しかもこの住所の近くであったので話を聞いて驚いた。その昭二郎になぜ鬼板師になったのかと聞いてみると、次のように語ってくれた。

ええと、隣の家が小さい時にね、隣の家が鬼瓦をやっとして、あの、鈴木製瓦かな。そこで鬼を見ていながら、だんだん大きくなっていくうちに、まあ、鬼の道に入って。豊橋で豊岡中学を出てね、それで経歴が書いてあるんだけど。

ええとね、(昭和)27年に、あの、鈴木さん(鈴木製瓦)のところへ世話になってね。ええと、36年まで、あの、そこで使ってもらって。小僧から始まってね。

柳沢の家がたまたま鈴木製瓦の隣だったことが事の始まりであった。昭二郎は次のように言う。

まあ、結局、隣だけ。遊びいっとる間にやってみるかになっちゃったじゃないかな。ずっと子供たちと遊んどるもんで。土いじっとる間にその方に行っちゃったじゃないかな。記憶は無いけど、自然に入って行っちゃったわな。

確かに鈴木製瓦と家が隣同士であったのは何かの縁であろう。しかも鈴木製瓦は名前の通り瓦屋であって鬼板屋ではない。ところが鈴木製瓦は一般の和瓦だけでなく、鬼瓦も一緒に作る瓦屋であった。つまり屋根の上の瓦全てを同じところで作っていたのだ。昭二郎

は鈴木製瓦について次のように言う。

まあ、やっぱり、一般の屋根から神社仏閣全部やっとしてたもんね。

このように不思議なめぐり合わせによって昭二郎は鈴木製瓦へ小僧として入ることになる。ただ興味をそそられる事が一つある。六人いた男兄弟のうちで昭二郎一人が鈴木製瓦と繋がりを持っていることである。おそらく他の兄弟も昭二郎と同じように鈴木製瓦へ遊びに行っていたと思われるが、他の五人の兄弟は鬼板師にはなっていない。やはり昭二郎本人に何か特別に鬼瓦に対して惹かれるものがあつたものと思われる。

豊岡中学を出て鈴木製瓦へ小僧として入つたので、昭和26年ごろに15歳で鬼師の世界の門をくぐつたわけである。その当時、鈴木製瓦には四人ぐらい職人がいたという。昭二郎はいかに鈴木製瓦で技術を身に付けていったかについて話してくれた。

やっぱりね、学ぶって、手にとって学ぶじゃなくて、やっぱり、自分が努力せんといかんじゃないかな。時間外に作つたり。手にとって教えてくれるような仕事じゃないもんでね。

やっぱり、あの、仕事を見てね、それ、あの人はこうやってたよな。俺やっとなることは、こうじゃ。これじゃ向こうの方がいいとかね。

やっぱり、仕事を盗むというのはそういうとこでね。あの、仕事しとっても、手にとって「ここはこうやってやれ」とかやれるような仕事じゃないもんでね。

自分で、あの、なんか作って、それだ、いつまでたつても納得のいくような仕事

は出来んわね。自分にはそんなもんで、まあ、図面を描く<sup>か</sup>のだってね、教えてもらえんで、描くの見とってね、ああやっていくんだとかね。

工場への出し方とか、まあ、聞いておって、それで覚えていかんと、手にとってね、なかなか教えていけないもの。それで、そういう点で、あの、自分が進んでいかにゃいかん仕事じゃないかな。待つとったじゃ。

このように工場で教わるという事はほとんど無かったことが昭二郎の話からわかる。それ故、「見て盗む」という事になるが、昭二郎の場合は次のような形を取った。

(仕事の) 流れの中で見とって、その時にやるわけにゃいかんもんで、仕事が終わってからやるとか。使われとるだで、そういう時間外に。

まず、時間外に無駄ごとやってるのは何ともいわへんから。

実際に粘土も自由に使っても良かったといっている。しかも現在は多くのところが週休二日になり、祭日もとても多くなったが、当時は全く違っていた。

わし達は、まあ、当時、1日、15日が休みだけなもんでね。今みたいに週休二日制なんて…。

今みたいに遊びに行くとこも無いしね。それでまあ、やとっただけどね。

つまり、場所が隣という事もあり、休みの日さえも仕事場へ出てやっていたことが多かったという。

平成21年7月11日に柳沢鬼瓦へ再度訪れた。いろいろなところを確認する作業が出てきたからである。昭二郎は数年前に病気を患い、平成12年に会った時と比べると、別人のようになっていて、経営の方は既に息子の利已に移っていた。幸い、まだ意識ははっきりしているの、さらにいろいろ昭二郎から聴くことができたのはありがたかった。特に聞いたかったのは修業時代の話であった。昭二郎は鈴木製瓦に昭和27年に入り、昭和36年まで約9年間働いている。

鬼瓦の修業ていうのは、手にとって教えてくれへんもんでね。あの、職人がやるのを見て、ほんで、自分で覚えてかなきゃいかんもんだい。で、まあ、親方も手にとってね、教えてくれやへんし。それは自分の努力だな。そうだと、自分は人のを見て、ほいで、覚えてくと。作って。そういうあれじゃないかな。うん。今でもそうだと思うけどね。

一番最初はどんな鬼から始まったのかと聞くと、昭二郎は次のように応えるのであった。

まあ、ごく簡単な鬼だね。うーん、跨ぎ鬼だったじゃないかな。今のカエズのようなもんだね。表、柄も何も無い、筋彫りだけでね。

これが出来るようになると次に進む事になると昭二郎はいう。

まあ、雲の付いとる鬼をやってくれけど。雲も手でもってくと。そういうわけだね。

このあたりになると、実際に見本とか、サンプルのようなモデルが置かれるのかと聞いてみた。

まあ、見ておるもんだいね。やり方はわかってるもんだい。みんなやってるもんね、それを…。

つまり、目の前に物を置いて習うのではなく、もう仕事場でいつも他の職人が作っているので、この頃にはほぼ工程が頭に入っているのである。しかも、同じ仕事場でほかの職人が作っているのだから、いわゆる「見て盗む」ことになる。

真似してね。上手い、出来のいい、悪いはねえ。出来のいいわけないだもんだい。長いもんだい。まあ、そうやって努力して、みんなあれしてたじゃないかな。

手作りはみんな手付けだもんだい。何をやっても一緒なんだわ。大きいか小さいかだけで。ほんで、今度は、まあ、自分が慣れてくと、自分で図面を引いて、ほいで、鬼を作ってくと。まあ、それで、日によっては、親方がみな図面描いてくれるもん。それ見習って…。

つまり、ある程度できるようになると、親方は職人の技量をほぼ正確に把握しており、それぞれ易しいか難しいかに応じて適切な鬼を職人に渡す事になる。そして、出来上がった鬼は良ければもちろんパスするのだけれうが、出来の悪い場合どうなるのかと聞いてみた。

こわいちゃうよ。

うん、それに傷が出たりなんかしちゃうとね。まあ、売り物にならへんもん。だから、みんなほかつちゃう。

親方は職人の目の前で壊す事はほとんどなかったらしい。

うーん、見ておらん時のが多いね。知らんどの間に壊れて、あの…、捨てられた。「ああ、またダメなんだなあ」って言ってね。また、やるわけだ。

ほいで、また作るもんだい。悪いものはみな捨てられちゃうなあ。「これはここが悪い」って教えてくれやいいけどね。なかなかそこまでやらんだわ。

ポーっとほかって、「ああ、また捨てられちゃったかな」で終わっちゃうもん。「ここが悪かったで捨てただよ」って説明してくれやいいだけね。

そして捨てられた時、相談する相手がそもそも仕事場にはいないという。

やっぱり、職人さんおっても、だいたい敵みたいなもんだもんね。

私が昭二郎の話聞いて、「ええーっ、敵ですか」と言うと、

はは、一緒にやっとな。だもんだい、捨てられて文句をいえるようになりやいいけどね。なかなかそうはいかん。

後から、捨てられた鬼をひろってどこが悪いのかを自分で確認する事はあったのかと聞いてみると、

まあ、バラバラになっちゃうもんで見ようがない。

まあ、何べんも捨てられて、捨てられんようになって来たっちゃうだけのことだな。

それ故に「見て覚える」しか手がないこと



第1図 鈴木製瓦

左：坂田オ一 中央：柳沢昭二郎 右上：鈴木喜三郎

になってくる。そして終わりのない修業がずっとその後も続いていくのである。

当時、同じ仕事場で目標とする人は誰だったかを尋ねてみた。たとえ周りの職人が「敵」とは言いながらも。

まあ、そんな時は親方だわな。鈴木… 喜三郎。

あの、早いしね。仕事は汚かったけどね。早い、作りが。ほいだもんだい、獅子を作っても、何を作っても、早い。

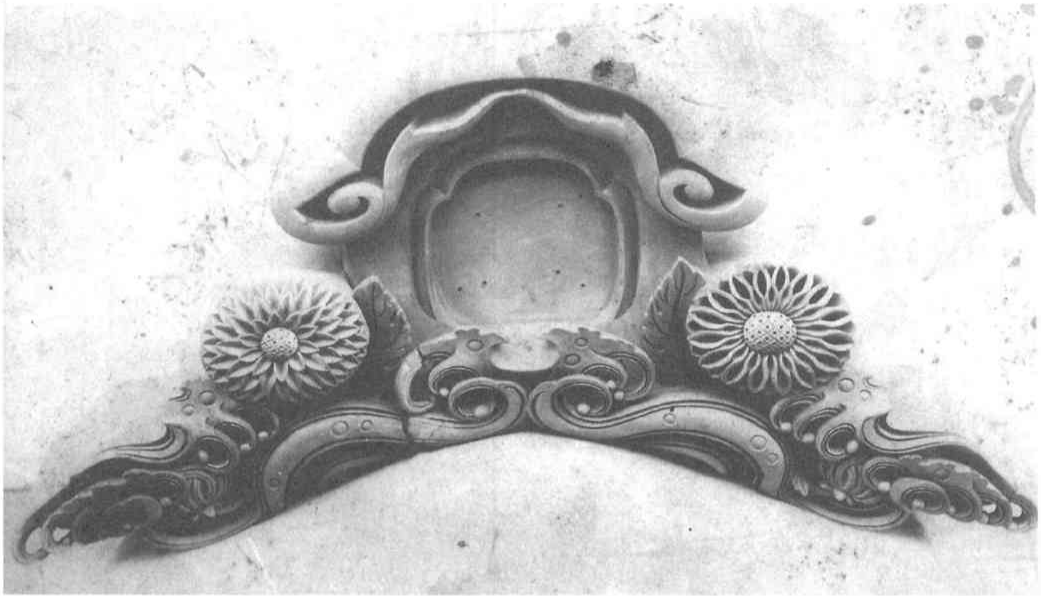
昭二郎が「汚い」と言ったので、その意味をもう一度確かめてみた。おそらく仕事場で使う独特の言葉だと思ったからである。

あの、綺麗に磨くっちゅやあ、綺麗に見えるだら。まあ、結局こっちで言うと、

雑だって言う事だ。

とにかく、当時の昭二郎にとっては、鈴木喜三郎の作りは見た感じが雑に見えたことになる。ただ手早い親方の作りと納期に間にあわずその技量に魅せられていたように思える。

昭二郎が居た仕事場には、二人の職人がいたという。一人が年配の人で、小矢喜太郎であった。全国を旅して修業してきた人で、とても綺麗な仕事をする職人であった。もう一人が坂田オ一といい、やはり、腕のたつとでもいい職人であったという。ただ少しむらっけがあり、仕事に対して波がかなりあったという。仕事場ではお寺の鬼を作ることが多く、主に作っていたのは昭二郎を含めた職人三人であり、親方の喜三郎はもっぱら窯を焚いたり他の仕事に精を出していたという。(第1図参照)



第2図 角張ピン付菊水足付 鈴木喜三郎作  
(喜三郎が弟子の田中満へ与えた写真)

その頃はお寺が多かったな。まあね、田原から豊川あたりね。まあ、新所原かな。あの周辺みな納めとった。瓦屋さんにね。まあ、あの当時だと、今みたいに車ありゃへんから、リヤカーに積んでね。

田原まで鬼持ってってもね、行きだけで、5時間かかる。坂があるもんね。5時間。「行って来ーい」っていやあ、行かないかんもん。

結局、あのあたり一面、渥美半島一面、一応全部納めた。(第2図参照)

ところが昭二郎は、昭和36年に鈴木製瓦を出て、高浜にある神仲という鬼板屋へ移ったのであった。事実上生まれ育った豊橋の地を捨てて、新天地、高浜へ転居したのだ。同じ地区でのほかの鬼板屋への移動は昔はよくあったのであるが、東三河から西三河への移

動に当たっては、かなりの決断であったと思われる。昭二郎が25歳のときの出来事である。その時のいきさつを次のように語ってくれた。

あの頃、神仲さんで働いとった市古さんちゅう、やっぱし、豊橋からこっち来とっただ。夫婦でね。その人が誘いに来とった。あの、やっぱし、あの、伊藤さん(伊藤鬼瓦)の辺りに住んどっただわ。豊橋ではね。その人が、「まあ、一回来んか」ちゅうもんだい。ほいで、「行くか」ちゅうて来ちゃったわけだ。

もちろん昭二郎は別に義理があったわけではないので、はっきりとした職人としての計算が働いていた。

やっぱし、豊橋は、やっぱし、業者は少ないし、鬼に対しての職人さんの工賃が、

…、それと、…うんと競争するところがないだら。低いもんだい。うん、それで、神仲さんへ来たわ。こっちでは月に、まあ、あの頃で、二万円ぐらいだかな、…なるよっちゃうことで。

昭二郎は既に職人だったので、工賃は出来高であった。これは鈴木製瓦でも神仲でも同じである。しかし、大きな違いがこの二社にはあった。

まあ、一個に対してもあれだけど、大量に作ったわけだわ。豊橋と違って、そっちの方がよう出るもんだい。同じものをね、焼くとかね。そう、大量に作ってくもんだい、金額も多くなる。

しかし、さすがに昭二郎はこれを受けるにはかなりの決断が要ったようであった。何しろ昭二郎が生まれ育ってやっと確立した生活を再度、白紙に戻すわけである。

まだ、そんな出た事ないもんだでね。あの、思い切るに日にちがかかったけどな…。

### 神仲時代(昭和36年～昭和42年)

昭二郎は昭和36年25歳のときに、小僧から職人として育った鈴木製瓦を去り、生まれ育った町、豊橋を後にして高浜にある神仲の工場へ入った。当時の親方は初代の神谷仲次郎であった。現在の神仲のある工場ではなく、神仲の本宅がある道をはさんで向かい側にある旧工場が当時の仕事場であった。仕事場としては鈴木鬼瓦とそれほどの違いはなかったという。ただ、規模が職人の数でほぼ二倍であった。

当時、何人おったや。5、6人おったじゃ

ないかな。

大きな違いは職場そのものよりも作り方、流儀にあった。それは東三河と西三河の文字通り土そのものから来る違いであった。

豊橋と碧南、高浜とは、あの、流儀が、作りが違うもんで、難儀するはね。全然違う。

まあ、どう違うって、まあ、土も変わってくるもんね。土が違うとね、やりにくくなるし。なれた土と違うしね。作ってみんなことにはわからんだけどね。全然違うもんね。

うんとね、高浜の土は目が細かくて、へらのね、あの、滑りがいいわけだ。あっちは、また滑りが悪いもんだね。結局馬鹿にされとるんじゃない、土に。それで思うようにへらが滑らんしさ、始めはね。腰はね、まあ、強いもんね、こっちの土はね。豊橋は弱いもんね。全然違うよ。

次に鬼を作る流儀の違いについて昭二郎は説明してくれた。

まあ、ここの格好にしても、ちょっと違って来るしね。豊橋の方は丸みを帯びとるし、この高浜はちょっと角ばったようなものになってくるわね。そんなもんで、ちょっと違うね。だけど向こうの、こっち真似するわけにもいかんし。こっちへ来たたら、こっちのね、仕事覚えにやいかんわけで、それでまた一年生だね。

当時、神仲では親方はまだ初代の仲次郎であったが、既に二代目になる仲達が主力になってやっていたという。神仲では良くしてもらったと昭二郎は言っている。その昭二郎

に、親方の仲次郎の職人技を見て覚えている事があれば教えてほしいと聞いた。

あのね、わしが行ってからは、(仲次郎が) 仕事やってるときは無かったもんでね。だいぶ年だったもんね。見たこと無いだけど。

これが、誰が作ったよとは聞いてないもんで、だもんで、そんなね、余裕も無かったしさ、新しい土地で。

このように、昭二郎は職人として生きるのが精一杯の状態、もっぱら自ら作ることに集中していたのである。昭二郎は昭和38年には、結婚し、結果、夫婦二人で神仲の仕事場で働き始めたのであった。昭二郎のそばに一緒に居た奥さんのシズエが、その頃の話をしてくれた。

私(シズエ)は38年にやっぱり私も豊橋で。ほんで、あの、まあ、38年に一緒になって、(高浜へ)来て、やっぱり遊んどるわけにはいかんもんで、「じゃあ、少しずつやろうか」っていうふうで。

あの、自分はこう機械じゃない、ねえ、石膏型にこう詰めて、ねえ。うん。私なんか全然出来へんもん。その、石膏型があれば少しずつ覚えながら、ねえ。一緒になってやってって。うん。

鈴木製瓦から神仲に移って昭二郎は職人としてまた働き始めた。新しい職場の神仲では、親方から石膏型を渡され、作る個数をはっきりと指定されて、「これこれをいくつ」といった形で鬼瓦を作っていくことになった。それも中途半端な数ではなかった。

うん、図面はない。石膏型だもんね。も

う、この、「これを何百やれ」とかさあ。

「えっー」とその数に驚くと、次のように昭二郎は続けた。

そりゃ、もう、何千個ってやった。

すぐそばに同席していたシズエも応えて話してくれた。

一つのをね。…、一つのをね。うん、そればかりね、作ったよ。それを、神仲さんも、さばいとったもんだい。まあ、えらいことだよなあ。

つまり、神仲の本宅の前にある手作り工場では、実際は石膏型でもって次々と鬼瓦の大量生産をしていたことになる。昭二郎は次のように言う。

そうそう、みんな石膏だもんね。前の一軒が手作りの職人さんがおった。そりゃあ、神仲さん、あれだわ、大繁盛だ。

このように神仲旧工場は二棟あり、一棟が図面から起す手作り専門の仕事場、もう一棟は石膏型で大量生産をする工場だったのである。現在、神仲はプレス機械で大量に鬼を生産しているが、その素地はもともと神仲にあり、プレス機械が出る前は石膏型で、多くの職人を雇って大量生産をしていたのである。図面を引いて一から始める鬼だとかいう風にはいくら手作りとはいえ、行かないなど、話を聞きながら思っていた。結局、その鬼板屋の親方が何をを目指しているのかという経営のビジョンに左右される事は明らかであった。昭二郎は神仲時代に鬼板を作る技術というよりは、「大量生産は何か」を現場で目の当たりにし、一つの経営の仕方を体得したものである。



## 柳沢鬼瓦時代(昭和42年～至現在)

昭二郎は昭和42年に神仲から独立した。神仲にほぼ6年間職人として働いたことになる。正二郎には独立の思いがいつの頃にか生じていたようである。

まあ、一回やってみたいから、こっち(高浜)へ来るときから、そういう思いで来とるもんでね。「自分でやってみる」というね。まあ、難儀したけど自分でやりだしたからね。

別に神仲と仲が悪くなって出たとかいった話ではなく、どちらかという、昭二郎が独立する機会を待っていた感じである。

結局ね、あの、42年、今みたいに不況だったもんだ。鬼が一杯たまっとただよ。ほれだで、暇をもらうにもらいよかったという事だね。

やっぱり、まあ、家が建たんで、なんだい、作ってもたまっていっちゃう。まあ、そこでね、喧嘩してもいかんしさ。まあ、それで現在も、まあね、(神仲と)取引もしてるし。

暇だった。

そして気になったのは、独立した場所であった。昭二郎は豊橋生まれの豊橋育ちであり、実際に、何軒か瓦屋や鬼板屋があったのである。しかし、昭二郎は豊橋へは戻らずに、碧南へ居を構えて、柳沢鬼瓦を始めている。

やっぱり、仕事量が違う。あっち(豊橋)行っても、ねえ、ほやこっちでみな、押されちゃうもん。ほや、売れなくなっちゃう。

最初は夫婦のみの仕事場だった。そして、売りに行った最初の会社が宮正瓦工業であった。

で、そこに売りにいったら、「いいよ」っちゅう。まあ、忙しいときだったもんなあ。ほいで、買ってくれるようになって、そいでずっとや。まあ、宮正さんへ売るようになって、ほいで従業員が増えてきただな。

石膏型で主に鬼瓦を作っていた柳沢鬼瓦は製品が順調に出荷され、注文が取れるにしたがって、45,6年ごろには早くもプレス機械を導入している。手作りの方はほぼ職人3人ぐらいでずっと維持してきたというが、プレスのほうの従業員が増えて行き、最盛期で20人ほどの人が働く鬼板屋へ急成長したのである。この数はかなりの人数であり、高浜、碧南地区でも最大級の規模の鬼板屋の一つであった。またこの事は、昭二郎が神仲時代に何を体得したのかを物語っている。

鬼瓦を作るときの鬼板師としての姿勢について昭二郎に聞いてみた。事実、石膏型やプレス用の金型の原型も自ら作っていたのが昭二郎であった。(第3図参照)

屋根に載って引き立つようにね、作らにゃいかんと。うん、下において見るもんじゃないもんで、上に載っていいものが出来るようなのを作ろうと思ってやってるだけだね。(第4参照)

そして、昭二郎は一般民家の鬼瓦に柳沢鬼瓦独自の特徴を意図して入れている。それが「丸み」である。もともと昭二郎は豊橋の鈴木製瓦で修業をし、職人となっていることが当然のことながら反映されている。



第3図 鬼面跨（プレス製）を持つ柳沢昭二郎（平成12年1月20日）



第4図 本鬼面跨（手作り） 柳沢昭二郎作  
うん、あの、一般の影盛にしても、「丸み」



第5図 家紋（子持亀甲）入巴を製作中の柳沢昭二郎

がちよっと有るとかさ。うん、余り極端に変えるとね、あの、「こりゃ、あかん」となっちゃうもんね。そんだもんで、わからんように丸みを持たせるとかさ。

全般的には形は変えられんもんね。どっかでちょこっと…。(第5図参照)

平成21年7月11日に柳沢鬼瓦を訪れたときには既に昭二郎は事実上引退しており、かわって息子の利巳が二代目柳沢鬼瓦として働いていた。利巳は昭和41年12月27日生まれである。利巳はまず小学校頃の記憶を語ってくれた。

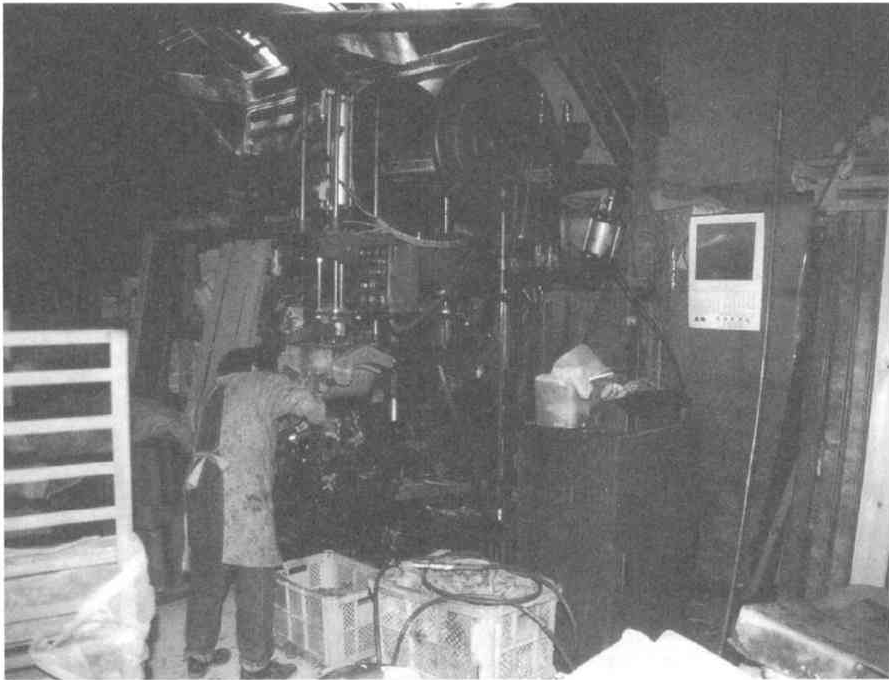
もう工場の前に粘土の山があって、そこで友達と遊んだり。で、そこから粘土を…。あと、土鍊機っていう機械入れて、形作って、職人さんたちが作ったたもんで、記憶ありますねえ。

晩御飯を食べて、それから両親が仕事にまた出て行くことが多かったんで、まあ、「仕事やりにいったかなあ」という、そういう意識はありました。

実際に工場を手伝い始めた事も利巳ははっきり覚えているのであった。

それは、もう、小学生高学年ぐらいの時には、あの、ちょっとした、鬼瓦という、ちょっと部品みたいなものがあるんだけど、それを僕らでも作れる感じのがあったんで、それを手伝ってアルバイト料をもらってったっていうのは…。

たまあに、そんな事があると喜んでやってたけど、今考えると割が合わんようなことだなあ。ただ、それが最初だな。小学校高学年ぐらいの頃にやったのが。それから、ちよろちよろと、あの、家紋っ



第6図 プレス機械で作業中の柳沢鬼瓦工場

てありますよねえ。あれの袋詰めだとか。

ビニール袋に入れて、あの、熱でこうピシャッと閉じて、溶かして、それをやりたりっていう記憶は在りますねえ。

ところが中学、高校となるとほとんど手伝っていないという。工場自体は忙しかったのであるが、十分に人がいたせいで、親から「やれ」っていうのを聞いたことがないのだという。そして、高校を卒業すると、東京にあるスクールビジネスという専門学校に入り、さらに鬼瓦から離れていった。

しかし、二十歳の頃の正月に工場の荒地の仕事をしていた人が怪我をして、「すぐに戻って来い」とはじめて親から声がかかり、この事件を機に一気に利巳は鬼板屋の世界へ引き戻される事になった。結局、東京は数ヶ月後には引き上げ、そのまま柳沢鬼瓦へ入り働き始めたのである。理由は当時、やはり今と違

い景気が良かったからである。

この時が実は利巳にとって手作りの鬼瓦を身に付ける一番の機会であった。事実20人ほどの職人が柳沢鬼瓦では働いていて、工場はフル稼働していたのである。さらには豊橋の鈴木製瓦へ昭二郎のように修業しに行くという話さえ出ていたのである。しかし、利巳本人が動かなかった。

その頃は、「手作りをやろう」、今でもそうだけど、「手作りをやろうという考えはなかった」ですけど。多分、自分でわかってんじゃないかな。「才能が無いなあ」っていうのが。

そう、絶対に向いてない。

何だろうなあ。不器用なんだろうね。やっぱり、指だけで作るもんじゃない。へらも使ったり、いろんな道具使ったりする



第7図 二代目柳沢鬼瓦 柳沢利巳

もんで、ちょっと触ってみると難しいもんね。思ったようには動かへんで。

このように、柳沢鬼瓦では鬼板の技術は利巳には受け継がれていない。利巳は配達が半分で、残りを荒地作りと窯を担当している。そして現在は利巳の姉妹である道代と（てるみ）がプレスで鬼瓦を生産している。（第6図参照）

このように事実上、白地の鬼板屋になっているといってもいい。そして実際に黒地の組合からは平成21年3月で脱会している。これは必ずしも柳沢鬼瓦に限った動きではない。組合全体の傾向をかなり正確に反映している。利巳はこの件について話してくれた。

毎月の会合だけでも、（黒地組合、白地組合、その青年部など）それだけ重なる、毎週毎週どれか入って来るもんで。

だいたい同じ顔ぶれで、同じような話だもんで。そしたら「別に無くてもいいか」って。で、何年前から、「白地とその黒（地）を一緒にしたらどうだ」っていう話も出とるぐらい。大分だぶつとる人も多いもんで。やっぱ景気が悪くなってからかな。そういう話がみんな出るようになったのは。

現在は、柳沢鬼瓦では、白地と黒地と陶器の三種類の鬼瓦を生産しており、そのうち最も出ているのは、陶器の鬼瓦であるという。また最盛期から見ると三割近くに生産が落ち込んでいる状況だといっている。（第7図参照）

さて本来ならこの辺りで柳沢鬼瓦についての研究は完結するはずであった。ところが、昭二郎とインタビューを繰り返しているときに、何度か出てきた気になる事柄があった。

それが昭二郎が修業した鈴木製瓦と豊橋にやはり現在もある伊藤鬼瓦との関係である。ところが、昭二郎は近年病を患ったことも重なり、その記憶が定かでなく、はっきりとした言葉が出てこなかったのである。ただ私自身既に伊藤鬼瓦については調査研究は終えていた事もあり、さらに伊藤鬼瓦の社長、伊藤善朗とは何度も会っていたのである。しかも私自身が豊橋に現在住んでおり、伊藤鬼瓦へは車で10分ほどの距離であった。結果、この件について善朗にたずねてみる事にしたのである。

#### 鈴木製瓦（戦後、昭和23,4年頃～昭和48年）

伊藤鬼瓦の善朗に鈴木喜三郎について話を聞いてみた。最初電話で問い合わせると意外に話が弾んで発展する事になった。これはもう直接会って話を聞かないといけないと思い、平成21年7月16日に伊藤鬼瓦の事務所に来ていたのであった。伊藤鬼瓦は初代が用蔵といい、用蔵は碧南にある鬼百に小僧として入り、職人になっている。つまり伊藤鬼瓦は鬼百系である。鬼百から独立して豊橋へ出て伊藤鬼瓦を興している。この用蔵の息子が豊作といい、二代目伊藤鬼瓦になった。この豊作と鈴木喜三郎が用蔵の元で鬼瓦の修業をしたと善朗は言っている。

両方とも（豊作と喜三郎）だね、戦争で出兵されて、戻ってから仕事が無い。喜三郎さんはなかなか大変な人だったもんで、「うち（伊藤鬼瓦）に来て何とか鬼瓦を覚えて、鬼瓦で飯を食いたいんだ」という事で一緒にやったらしい。

そいでね、仕事を覚えて喜三郎さんも出来るようになったらしい。親父も（豊作）「わしは一緒にやったでね」って言って

た。

このように明らかに鈴木喜三郎は大東亜戦争後、豊橋に戻り伊藤鬼瓦で親方、用蔵の元で鬼板師として働いていた。ところが喜三郎はちょうど柳沢鬼瓦の昭二郎と同じようにただ職人としてずっと働く事に飽き足らず、自ら独立したのである。そのいきさつを善朗が話してくれた。

家に遊びに来てね、何をやろうかってことで…。「ほいじゃ、瓦をやろうか。瓦屋なら売れる」と。「鬼瓦は売れんでも、瓦は売れるで、ほいでわしは瓦を作る」。一生懸命ね土窯を作って、高浜から来てまで（土窯を）築いて瓦を作り始めた。

これが鈴木製瓦の始まりである。伊藤鬼瓦から独立してしばらくは夫婦二人で屋号を挙げずに瓦屋をしていた。そして注文を受けると瓦だけでなく鬼瓦も一緒に作るようになったのである。理由はもともと喜三郎本人が鬼板師だからである。そうして徐々に営業が軌道に乗っていったところへ柳沢昭二郎が小僧として鈴木製瓦へ入ったのである。

伊藤善朗はさらに伊藤鬼瓦で手作り部門を担当している田中満という鬼板師を紹介してくれた。田中満は鈴木喜三郎の下で、鬼瓦の修業をして職人になっている。つまり柳沢昭二郎の次の世代に当たる。鈴木製瓦に入ったのが昭和48年だという。それ以降27,8年の付き合いだと満は言う。満は仕事場の様子を語ってくれた。それと昭二郎が語った話を重ね合わせると二人の間に世代の差こそあるとはいえ、鈴木喜三郎のやり方がより鮮明に見えてくる。

余り細かく教えてくれないけどね。「見て覚えろ」ってような感じで。今みたい

に手取り足取り教えてくれるような感じじゃなかったけどね。急所とか、まあ、「バランス悪い庭とか作るな」とは言われたけどねえ。まあ、「後は自分で考えてやれ」って感じだったね。

もう、それこそ自分流にやらんといかんような感じで。まあ、今日までやっとなるような感じだけどねえ。

このように喜三郎はほとんど自ら教えるといったことは無かったようである。当時すでに喜三郎の息子の喜代春が職人として働いており、基礎的な鬼は喜代春から直接習ったといっている。修業時代の大雑把な鬼作りの流れを満は話してくれた。

図面は大將（喜三郎）が自分で型紙作って、でまあ、ある程度やってもらって、ま、二人でもやってるような感じですかね。後は「頼むよ」ってな感じで。もう余計な事、細かい事はもう何も言わない。僕もまあ覚えるのに必死で、「こんな感じかな」って感じで僕も今までやって来たけどね。

そして鬼が完成しても喜三郎は何も言わなかったという。ここも昭二郎の話と重なり合っている。

いい悪いも言わなかったね。今考えると。

逆に厳しいんじゃないかな、その方が。「ここが良い」、「悪い」とか直接言ってくれりゃ、どんだけ助かったか。

満は話が終わるとなんと鈴木喜三郎の息子喜代春のところへ車で連れて行ってくれたのである。喜代春のところでもまた新たな発見があった。まず喜三郎の事だが、明治45

年（1912）12月13日生まれで、平成16年（2004）6月11日に亡くなっている。92歳であった。また鈴木製瓦は昭和48年（1973）に営業をやめていた。戦後伊藤鬼瓦へ入ったのは確かだが、実際に働いたのは2、3年という短い期間であり、やがて独立したのである。さらに新しい事実がわかった。伊藤鬼瓦へ入ったときはすでに喜三郎は鬼板師として職人であった事だ。このことは伊藤鬼瓦で用蔵のもとで鬼板の修業を一から始めたのではないことを意味する。喜代春が説明するに、父、喜三郎はもともと高浜の出で、なんと神仲に小僧として入り、4、5年勤め上げて、年を明けて豊橋へ出たのだという。つまり喜三郎の最初の親方は伊藤用蔵ではなく初代神仲の神谷仲次郎となる。修業した時代は憶測だが昭和10年代前半であろう。ここに至って鬼板師の系図をたどる事が可能になる。神谷仲次郎は鬼福の石川福太郎の弟子であり、石川福太郎は山本吉兵衛の弟子なので、鈴木製瓦は大きくは山本吉兵衛の末流に当たる鬼板屋になる。最も表看板は瓦屋であるが。喜三郎が戦後、生活するために入った伊藤鬼瓦は鬼百系である。ここも大きな枠組みから見ると山本吉兵衛へと直接繋がってくる。以上の事を持つてすると、柳沢鬼瓦は神仲を経由して大きくは山本吉兵衛系に繋がる鬼板屋であることが判明する。

## まとめ

平成12年から始まった柳沢鬼瓦の調査は他の鬼板屋全体の調査が進展していく事によってその位置づけが明らかになっていった。しかしつい最近まで、柳沢鬼瓦を第4グループに入れて文字通り新興の鬼板屋として考えていた。これは柳沢昭二郎本人も同じである。なぜなら、事実、昭二郎は小僧から始まり職人として成長し、一度職場を鈴木製瓦から神仲へと大きく変えてはいるが、後に独



立して一代で鬼板屋を興したからである。この柳沢昭二郎のライフヒストリーのみを見ると、第4グループの鬼板屋群に入らざるを得ない。そして実際にそのように見なして全体の構成を考えていた。それが柳沢鬼瓦を後に回した一番の理由であった。

ところが、昭二郎と話しているときに気になることを何度か昭二郎本人が言及したのである。それが昭二郎が職人になった先の鈴木製瓦と伊藤鬼瓦の関係であった。たまたま伊藤鬼瓦は鬼百系のグループのメンバーとしてすでに調べていた事と、すでにその過程で、伊藤鬼瓦の社長である伊藤善朗氏とは親しくなっていた事も重なって、調査を打ち切らずに継続したのである。その事が運よく知らなかった事実へたどり着くきっかけになったのであった。問題は鈴木製瓦にあった。名称が「…製瓦」なので、その名称を見たその時から鬼瓦や鬼板屋とは無関係と考える事が起きたわけである。鬼瓦屋とは無縁の何か別物と判断したのだ。何しろ今までもっぱら鬼板屋ばかり追いかけてきたのである。当然といえば当然の処置である。ところが、鈴木製瓦の親方、鈴木喜三郎は瓦屋でありながら自らは鬼板師であった。しかも出自がはっきりしていたのだ。もともと高浜出身であり、昭和13、4年頃に神仲に小僧として入り、年を明けて鬼板師になっている。やがて戦争のため出兵し、戦後、豊橋に戻って伊藤鬼瓦に入り職人となって、また鬼師の世界に戻ったのである。ところが日本社会が戦後復興し瓦の需要が増えるのを見て、喜三郎は独立を決意して、鬼板屋ではなく、鈴木製瓦を興したのである。

ここに至ると、柳沢鬼瓦の位置が大きく動く事になる。第4グループにあった柳沢鬼瓦は第1グループの山本吉兵衛系に入り、さらにその下位グループ、山本吉兵衛の弟子の一人である石川福太郎系へと組み込まれる。石川福太郎系の筆頭が神仲だからである。

また、昭二郎が鈴木製瓦から昭和36年に神仲へ移った出来事も、鈴木製瓦が元々、神仲と深い繋がりがあり、伊藤鬼瓦から鈴木喜三郎が独立してから、仕事の上で神仲とまた新たに関係ができたものと思われる。それ故に神仲で働いた職人夫婦が豊橋に来て、柳沢昭二郎に声を掛け、神仲へ移る事を勧めたのであろう。そしてその神仲の鬼板の流儀と知らずに鈴木製瓦で受け継いだ柳沢昭二郎は親方の鈴木喜三郎が小僧から修業した神仲へのいきさつを知らずに移ったのである。言わば先祖帰りであった。神仲で職人として約6年勤めた昭二郎は親方の鈴木喜三郎と同じように神仲から独立して、柳沢鬼瓦を立ち上げ、その後は現在に至るまで営業先の一つとして神仲と取引を続けているのである。このように見て行くと、柳沢鬼瓦ははっきりとした第1グループの一構成員である事がわかる。

また今回、調査研究を行いながら、最後の土壇場になって物事の見方が一気に変わってしまい、まるで一人で社会規模のオセロゲームをしているかのような感覚になったことは事実であり、紛れも無い実感でもある。

#### 注

- 1) 愛知県の三河地区で三州瓦を生産する瓦屋群がある。ここは日本最大の瓦の生産地である。その中において特に鬼師または鬼板師という「鬼瓦」を作る人々に特に興味を持ち、調査研究し始めたのである。ほぼひと通り各鬼板屋を巡り歩いて、沢山の鬼師たちと話をし、全体像が見えてきた時点で、「鬼師の世界」と銘打ってシリーズのような形で、その世界について愛知大学の紀要に書き始めたのである。この第4グループとは、三州にある各々の鬼板屋をまとめるときに意味あるグループとして系列を調べ、系列ごとにグループ分けをしたのである。その編成を試みた結果出てきたのが第1から第4までのグループだった。ちなみに第1グループが山本吉兵衛系、第2グループが神谷春養・岩月仙太郎系、第3グループが山本鬼瓦系である。



最後のグループは鬼板屋としての系統樹が十分に発達していないグループを指す。別の言葉で言うと、三州鬼板屋の中において比較的起源が新しい鬼板屋群の事である。それを第4グループと名付けた。

#### 参考文献

- 石田高子 1983年 『薨のうた』愛知県陶器瓦工業組合.
- 駒井鋼之助 1963年 『粘土瓦読本』彰国社.
- 三州鬼瓦製造組合・三州鬼瓦白地製造組合 2000年 『三州鬼瓦総合カタログ2000年度版』三州鬼瓦製造組合・三州鬼瓦白地製造組合.
- 吹田市立博物館 1997年 『達磨窯』吹田市立博物館.
- 杉浦茂春編 1982年 『高浜市誌資料(六)』高浜市.
- 高浜市伝統文化伝承推進事業実行委員会編 2003年 『鬼瓦をつくる～愛知県高浜市の三州瓦～』高浜市伝統文化伝承推進事業実行委員会.
- 高原隆 2002年 「鬼師の世界——三州鬼瓦の伝統と変遷」『文明21』第9号: 227-247.
- 2003年 「鬼師の世界——黒地: 山本吉兵衛(1)」『文明21』第10号: 163-189.
- 2003年 「鬼師の世界——黒地: 山本吉兵衛(2)」『文明21』第11号: 81-132.
- 2004年 「鬼師の世界——黒地: 神谷春義・岩月仙太郎(1)」『文明21』第12号: 113-165.
- 2004年 「鬼師の世界——黒地: 神谷春義・岩月仙太郎(2)」『文明21』第13号: 155-175.
- 2005年 「鬼師の世界——黒地: 神谷春義・岩月仙太郎(3)」『文明21』第14号: 97-111.
- 2006年 「鬼師の世界——黒地: 山本鬼瓦系(1)」『文明21』第15号: 183-208.
- 2007年 「鬼師の世界——黒地: 山本鬼瓦系(2)」『文明21』第16号: 93-116.
- 2008年 「鬼師の世界——黒地: 丸市、(杉莊)、萩原製陶所(1)」『文明21』第19号: 55-72.
- 2008年 「鬼師の世界——黒地: 丸市、(杉莊)、萩原製陶所(2)」『文明21』第20号: 75-100.
- 2008年 「鬼師の世界——黒地: 丸市、(杉莊)、萩原製陶所(3)」『文明21』第21号: 73-95.
- 2009年 「鬼師の世界——黒地: 鬼福製陶所、藤浦鬼瓦(1)」『文明21』第22号: 83-104.
- 2009年 「鬼師の世界——黒地: 杉浦彦蔵と窓庄」『愛知大学総合郷土研究所紀要』第54号: 57-81.